

### オクタビオ・パス『孤独の迷宮』を読む(3) オルテガ, 大江を手がかりとして

AWA, Yumio / 阿波, 弓夫

---

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Language and culture / 言語と文化

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

177

(終了ページ / End Page)

214

(発行年 / Year)

2012-01-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007758>

オクタビオ・パス  
『孤独の迷宮』を読む（3）  
— オルテガ、大江を手がかりとして —

阿波弓夫

El maíz es una planta silvestre y los indios mesoamericanos lo domesticaron y la inventaron, por decirlo así, ésta es una de las grandes creaciones de la humanidad, comparable, a mi modo de ver, al descubrimiento del fuego.

O. Paz; México en la obra de Octavio Paz, FCE, 1986.

われは、われとわれの環境である。私がもし私の環境を救わなければ、私自身を救わないことになる。

オルテガ『ドン・キホーテをめぐる省察』長南実訳、白水社、1968。

第1章 『ドン・キホーテ』と『パイドロス』

オルテガ・イ・ガセー（以下、オルテガ）は、その処女作『ドン・キホーテをめぐる省察』<sup>1)</sup>（以下、『省察』）劈頭の長大な序文を開始するにあたり「読者よ……」（11頁）という呼びかけの言葉を選んでいる。ラテン文化圏の文人らしい外界への親和的気分を湛えたものである。それは、哲学への硬直したイメージを払拭したいとの理想と、1914年というヨーロッパ史の決定的瞬間に人間性と人類の未来を問うときの必須の課題認識と、創造的精神性を示している。長大な序文よりむしろ、短かすぎる要約とも言うべき同文は、哲学とは何かを問う、あるいは問い直すことを主目的とする。そこで彼は、このような文体の理由を述べている。哲学とは「明澄性なり」と。複雑なるものを白日の下に曝して、それを万人の目に明白なものにすること、である。スペインに哲学

が生まれないのはなぜか、と問う。「非常な気負いが感じられ、必要以上にその博識ぶりを披瀝している」(353頁)確かに、オルテガはヨーロッパの言論界に新哲学宣言を公表するかのようだ。特に、西欧から見れば一種の「闖入者」の登場であろうし、そのことを誰よりもよく見抜くオルテガだからこそ一層大仰なロゴス展開となるのも意識してのことだ。相手の反応を予見した上で、敢えてその「構え」を見せる、新しい哲学のもつ一種の「挑発行為」ではないだろうか。「難解性」(353頁)それ自体が問題なのではない。意に反して「難解性」を装って「読者よ……」と呼びかけざるを得ないところが、ヨーロッパ特に西欧の思想的・哲学的伝統の病的欠陥としてあることが、オルテガからはよく見えていたのではないか。堀米庸三に従うと、まさにマージナル・マンのオルテガは、マンハイム同様に自分サイドの思想界だけが人類の行方を決しているかの錯覚を抱き続ける、西欧近代の思想的推進者たちへ積年の不信感を募らせていたのではないか。それが、あの高踏派で挑発的なまでの難解さに富む言説によって揶揄されてもいる。筆者は優れた日本語訳によってオルテガの「企て」がよく理解できた。それは難解さとは対極的にして、親和性、諧謔性に溢れた表現スタイルを意味するほか、深刻な危機意識に根ざすオルテガの、救済の精神の所産である。スペインが哲学に不向きとする見解は、彼の祖国愛の裏返し、英雄的な挑発であろう。哲学上の問答法でも挑発ほどカタルシス効果を発揮するものはない。筆者は、これと同じ経験をパスのある「定言」のうちに記憶している。これは「メキシコ人ほど猜疑心の強い国民はない」<sup>(2)</sup>という文言である。同氏自身の体験に照しての考えであるから、浅薄な個人的印象での反論は慎重でなければならないが、かつて筆者のメキシコ人観を活性化させられたことがある。オルテガによると、スペイン人の哲学不適性の理由は、「特定のイデオロギーに身を委せ易い」ことによる。その性癖が哲学に不適切なことは誰でも理解できるが、同氏の言葉をもって繰返しておくと、「何ごとでも敵意する一点に意識は停滞してしまう。部分と全体の意識はなくなる」ことによる、と。しかし、これはトートロジーではないか。部分と全体の区別がつかないから、特定のイデオロギーに組しやすい、とも言える。この「西洋評論」<sup>(3)</sup>の主幹はギリシャ哲学における論証精神を蘊えらせる。序文に続く「予備的な省察」(46頁)と題する章の冒頭、「木と森」の頑健なメタファを提起しているが、視覚的安易さに飛びつき思考停止に陥る点を突くもので、ここではアラビア哲学における実験精神が喚起されている。つまり、ギリシャ哲学とアラビ

ア哲学の相異なる精神の合流が意図されるのである。オルテガはスペインこそがこの二つの哲学の精神の合流点だと殊に主張することはない。しかし、スペイン人哲学者オルテガにとり、西欧に向け哲学を宣言するとは、救済に向けてのマージナル・マンとしての気負いがあったと考えても大きく外れてはいないようだ。オクタビオ・パスも1942年の「孤独の詩、感応の詩」、1954年の「回転する記号」において、新しい詩学宣言をしている。われわれは、二人のマージナル・マンによる救済の行為に深い歴史的継続性を意識するのである。「読者よ……」は、『孤独の迷宮』(以下、LDS)が劈頭に置くマチャドの引用、「他者性についての韻文」が照応する。『省察』の冒頭で『パイドロス』を引用して、プラトン哲学の中期対話篇のひとつをわれわれに印象付けるのである。勿論、なぜプラトン中期の作品がオルテガの哲学処女作のモデルになるのか、については別途に検討すべき事柄ではあるが、今は立ち入らないでおこう。長南訳の秀逸さにもよるが、その言説の居心地の良さに忘我していると見えてこないが、その対極にあるものとの緊張関係を鋭く暗示する。同書の出版年も1914年、第一次世界大戦勃発と同時期で、しかもヨーロッパを二分して戦われたこの民族対決の一方は、スペイン人の血脈の一部をなすドイツである。8世紀の半ば、ゲルマン系西ゴート族の侵入以来、スペインの一角にドイツは根付いている。西欧からはじき出された者同士、共感するところも多いのではなかったか。パスは1951年、パリ亡命中のオルテガと直接面会している。聴衆は講演者オルテガに冷笑を浴せる様子を記憶にとどめている。特に、フランス、スイスの地方在住の教員たちについて<sup>(4)</sup>。ジャーナリスト、評論家、哲学者、出版人などオルテガの呼称は様々だが、むしろ詩人が一番相応しい。時流に抗して、それ以外の水には馴染めない詩人である。ヨーロッパの思想的崩壊をその周縁部から眺望するオルテガには自身の救済そのものがかかっている。

こうした本書『省察』の環境を念頭に置くと、同章冒頭に掲げられるドイツ人哲学者ヘルマン・コーヘンからの引用、「もしかすると、ドン・キホーテは道化芝居ではないのか」(46頁)は、著者の真意が計りかねる。優れてプラトンの問答法の手法であるが、「読者よ……」に続く本文「予備的な省察」が始まり、まさにその境目にコーヘンの謎めいた文言が配置されるのである。スペイン人の気性を心得たような気配りではあるが、われわれの論証的、かつ実験的精神を試めす。再びギリシャ哲学に戻ることに、である。しかも、その源流に不可分に連なるアラビア哲学の精神をも継ごうとする意識がオルテガの情熱の

源となっている。それが彼の西欧に対する気負い、である。自分自身であろうとするとき、そのものは英雄と呼ばれる。崇敬する西欧思想への抵抗こそ「英雄の生」、つまり「日常的なもの、慣習的なものに対する永遠の抵抗」(156頁)である。コーヘンは、われわれの日常化し、慣れ切った精神を、小林秀雄風に言えば「仏壇に飾り香を焚く」とも言い換え可能な「ドン・キホーテ像」を、わが目前で倒壊させる。即ち、スペイン的現実を異化したのである。オルテガは、コーヘンの「定言」について本書全体を通じて何ら断言を下していない。それはコーヘンの問題ではなく、われわれの側の問題だからだ。部分(スペイン)の救済なしには、全体(ヨーロッパ)の救済もない。スペインの救済とは何か。それはスペインが真に自分自身になることである。「慣習に屈服し、物質に囚われる自分自身の部分から脱却しようとする絶え間ない努力」(156頁)によって初めて可能になる。ドン・キホーテを問うことは真の自分自身に向っての脱却の道、つまり他者性を意味する。これはオルテガの同時代人マチャドの行き着いた道でもある。慣習的なものや日常的なものを問う理性に対して、それを眠りこけているものや自己保存のために引きずり下ろすという逆風が吹く。そうしたところから、英雄的行為があって初めて、全体の救済もある、というオルテガの信念がそこにはある。

『省察』は、新しいスペインの目覚めに向けての英雄的行為である。同書のスペイン語原題“Meditaciones de Quijote”について考えると、「省察」には形容詞句“de Quijote”が続くだけで、これを逐語訳すると、「ドン・キホーテの省察」という題名が出来る。オルテガは、前置詞“de”をこのように「めぐる」(長南訳)と「の」の二つの形容詞句的に掛けて用いている。この考え方が正しいとすれば、オルテガはその題名に、自分のドン・キホーテ的な行為という、自嘲するような笑いを忍び込ませている、と読めるのである。冒頭述べたように、筆者がオルテガに諧謔性を見たのも先ずその点による。彼は自ら範を示して、まず本来の自分自身に戻れ、という自分に対する反省をも表現しているのである。以上の点が解決すれば、オルテガが本文「予備的な省察」の第一項「森」において提出するゲルマンの諺「木々が森を見るのをさまたげる」(48頁)の真意を解説する条件が整ったようだ。彼は同第二項「深さと表面」(50頁)で早速英雄的行為を実践する。即ち、「(その)諺はくりかえし言われるけれども、おそらくはその厳密な意味は理解されていないのではないか。この諺を使って人をあざけるつもりでもおそらくは、この言葉はかえってそれを

口にする人に対して、そのあざけりの針をふり向けるかも知れない」、というのがそれだ。つまり、木々と森を比べる自分こそ、世界と自分を区別し比較しえるほど真に自分自身（つまり、森に対する木々）であるのかどうか自問するべきだ、と省察を迫られる。木と森の見えるか見えないかより先に、自分の足元を見つめよ、という逆襲である。実は、オルテガはこの論理（部分と全体のメタファ）をパイドロスの中から構造的に学びとっている。このようなプラトンからオルテガへの知の継承はパスにも続くものである。LDSは、外国（この場合、パリ）で執筆されたものであるのに、「メキシコの歴史と文化」を議論しているように見える。しかし、オルテガ的に言うならば、ヨーロッパ救済的な意味をもつものであること、それがメキシコを「材料」として用いて行なわれている。その行為がまさに英雄的行為であるのは、慣習的なもの、日常的なものに抗して本来の自分自身に戻ろうとするからである。その行為をパスは「迷宮」という詩的イメージで表現したのである。その最終章に、「孤独の弁証法」を配したパスと、対話を通しての論述の形式に、ディアレクティケー（弁証法）を実践したパイドロス（つまり、プラトン）の双方が構造的に照応していることは興味深いことだ。以上のような読み筋から、オルテガとパスの源流たる『パイドロス』をもう少し間近に検討してみよう。

## 第2章 『パイドロス』の中のパスとオルテガ

オルテガを読むとパスが懐しく響いてくる。パスを読むとオルテガの格調高く、同時に情熱的な語り口調が蘊る。活動の時代も場所も異なるこの二人の親近性の由来は、様々な議論が可能だが、その一つには、プラトン哲学に共通の根をもつことによる。『ドン・キホーテをめぐる省察』が対話篇『パイドロス』に立脚することは、「理解への情熱」に関して『パイドロス』からの引用（17頁）を用いることでオルテガ自身示唆するところであるが、愛、知識、言論、弁論家、あるいは知識人など共通の主題がそれを必然のものにしている。

オルテガは「読者よ……」の冒頭で、「われらの論文には知識伝達の価値はまったく欠けている」（11頁）と述べている。これは、「愛知の学」の本質を知識と伝達と価値という三つの概念をもって述べたものである。前章でも触れたように精神的、宗教的行為としての「理解」と知識や博識とは決定的に異なる。これらの「論文」と同様に、『パイドロス』も、プラトンの対話篇のすべ

てがそうであるように、詩的散文として多義性に満ちている。この点を理解するために少し長い引用する。

パイドロス　ところで、ゼウスに誓ってほんとうのところを打ち明けてください、ソクラテス、あなたはこの物語（ボレアスがオレイテアを、この川のどこかでさらっていったという伝説のこと―筆者）をほんとうにあった事実だと信じていらっしゃいますか。

ソクラテス　いや、たしかに。もしぼくが賢い人たちがしているように、そんな伝説は信じないよと言えば、当節の風潮に合うことになるんだろうね。（この部分は、前章で検討したヘルマン・コーヘンの〈ひょっとするとドン・キホーテは道化芝居ではないのか〉という問いに共通する風潮を感じさせる―筆者）そして学のあるところを見せながら彼女オレイテアがパルマケイアといっしょに遊んでいるとき、ボレアスという名の風が吹いて彼女を近くの岩からつき落したのである、彼女はこのようにして死んだのであるが、このことから彼女がボレアスにさらわれて行ったという伝説が生まれたのである。あるいは、アレスの丘からつき落した、と言ってもいい。〈略〉そういう説明の仕方はたしかに面白い（略）<sup>(5)</sup>

このエピソードを逆手にとって、暴行された女性を実際に知っているのか人に尋ねて回った、とパスはLDSの中で語っている。LDS(0)<sup>(6)</sup>で検討したように“Chingada”の語源に関する風評議論は、このオレイテアの死をめぐる議論とどこか似かよっている。ソクラテスは、そんな事柄に関わる時間が惜しい、それに反して、パスはどこまでも探索して回った、とそれぞれ行動様式に差異がある。前者は、自らの内に沈潜していく論証精神、後者は、問いを検証していく実験精神へと、それぞれの傾きが象徴されている。

「それにこんなことをする人はあまり仕合わせでもないと思うよ。（略）その人はきっとヒポケンタウロスの姿を納得の行く形で修正しなければならないことになるし、さらにおつぎは、キマイラの姿をとということになる。さらにはまた、これと似たようなゴルゴやペガソスの群、妖怪めいたやからどもが大挙して押しよせてくるのだ。（略）ぼくはあのデルポイの杜の銘が命じている、われみずからを知るということがいちばんできないでい

る。それならば、この肝心の事柄についてまだ無智でありながら、自分に関係のないさまざまなことについて考えをめぐらすのは笑止千万ではないかと、こうぼくには思われるのだ」

ここでは世に知れた弁論家（当時の知識人）たちが、世人の興味をそそる、様々な説をもって議論を盛り上げる、そういうアテナイの風潮が本当に大事なもののから世人の目を外らせるための弁論家たちの単なる「おべっか術」にほかならないことを、知識、理解、愛、思考法などの本質を問い直した上で、より高い次元での知の在り方として明らかにしていく。ここには、オルテガが「木と森のメタファ」（50頁）を言うとき、彼の脳裡にあるエピソードの原型がある。また、次のソクラテスの問答は、LDS 第一章冒頭に表現される若き詩人パスの懊悩（生活者として現実を詩化するか、生を求めて詩を現実化するか）の中に、2400年を経て今日的に蕪っている。ソクラテス曰く、

「だからこそぼくは、そうしたことにかかずらうことをきっぱり止め、それについては一般にみとめられているところをそのまま信じることにして、いま言ったようにこういう事柄ではなく、ぼく自身に対して考察を向けるのだ」（16頁）と。

この話の流れからも明らかのように、ソクラテスが最初からそういう伝説に關しての異説通説に心を動かされなかったのかというと、決してそうではない。ある時期には、世間の人々と同様にあれやこれやの妄説に翻弄されたことを告白しているからだ。しかし、彼がそのまま世間に流されることはなく、むしろそれに逆行する方向を選択した（世間のもの笑いになっても一筆者）、ということがとりわけ重要なことのように思われる。何ごとにせよ、それを肯定するにせよ、否定するにせよ、ある特定のドグマからしてそれをイデオロギ的に判断して、固定した向き合い方しか出来ない点に、スペイン人には哲学は不向きだと考えるオルテガの思考の源流（「少なくともわれわれスペイン人にとって……（略）ある倫理的なドグマに熱狂するほうが容易なのである」（17頁））を求めることが出来る。同時にまた、若き詩人の生き方とも関わるLDS 第一章冒頭の問い、「我々は何者なのか、自分そのものをいかに実現すべきなのか」（1頁）の如く根源的が定式化される。即ち、「はたして、自分はテュポ

ンよりもさらに複雑怪奇で、さらに傲慢狂暴な一匹のけだものなのか、それとももっと穏和で単純な生きものであって、いくらかでも神々に似たところのある、テュポンとは反対の性質を生まれつき分け与えられているのか」(16頁)このような、実のところ深刻な対話がどのような環境の下で行なわれるのか。次の引用がそれだ。「こちらでは泉が世にもやさしい様子でプラタナスの下を水となって流れ、身にしみ透るその冷たさがひたした足に感じられるではないか」(17頁)と、神性すら帯びた、その至福の場所を見出すソクラテスが、その風景からは想像しがたい人間の現実についての問いをもって、落電のような深い切り込みを入れる。このような表現手段と手法の鮮やかさは特筆すべきである。プラトン対話篇の中で、最も文学性の高い作品と評価(藤沢令夫、加藤信朗)される、『パイドロス』だが、作品冒頭においてすでに読み手を感覚的に釘付けにする。

『パイドロス』の問答全体を思想的に解釈することは本稿の目的ではないし、また筆者の能力の及ぶものでもない。もっぱら、本対話篇の訳者で、優れた解説者でもあるプラトン哲学の碩学、藤沢に従うとして、まずどのような主題で問答が展開されるか。おおよそのところを挙げると、1. 弁論術の技術性に関する論議、2. 真の弁論能力は知を真に愛し求めるときしか得られないこと、3. 恋の物語、4. 哲人と文人の区別、などに様々な角度から照明が当てられ、そこから哲学とは何か、という究極の主題へと統一を与えていくのは、そのディアレクティケー(「弁証法」)である。それは、ものの「何であるか」を厳密な意味において知るための、探求の行程(メトドス=方法)として、ソクラテスから受け継がれたものであり、文字どおりには、「問答法」、「対話術」を意味し、最初から世上のいわゆる弁論術とのするどい対立の意識のもとに置かれていた。ここで、われわれは、LDSがその「第1章」冒頭でみたAかBかの二者択一の議論に始まり、「最終章」の「孤独の弁証法(“la dialéctica”)」で終ること、またLDS(1)で検討した、作家で文芸誌編集者のカルバージョとの論争においてみられた人格(persona)に基づき議論と、便宜(法)上の議論との落差も、弁論術に関する議論と構造的に類似のものであることを想起したい。Sí(肯定)か、No(否定)かの比較相対を競う弁論技術を脱してより高次の地平に議論を据え直す「対話術」「問答法」として根底的には哲学とは何かという「問い」への応答ともなっている。それはまさにオルテガが『省察』において究極の目標としていたことでもある。

本章の主題から少し横道に外れるが、『パイドロス』、オルテガ、パスには木や鳥など花鳥風月、つまり四大原素(地風火水)で共通するので、この点について若干触れる。ソクラテス(つまり、プラトン—筆者)が真正面からその自然観に触れる箇所がある。それは、パイドロスがソクラテスの出不精に驚いて、「あなたは城壁の外さえ出ることがない」と言う下だりである。ソクラテスはその理由を次のように言う、「ぼくはものを学びたくてたまらぬ男なのだ。ところが、土地や樹木はほとんど何も教えてくれようとはしない」「土地」はここでは landscape(「風景」)に相当しよう。したがって「樹木」とともに「自然」という意味で解釈しても大きく外れてはいまい。冒頭部分の見解(文章)をもって作品全体を貫く基本思想と見做すことは性急すぎるかも知れない。筆者はここでギリシャ自然哲学を論じるつもりはないし、ましてやその資格もないのだが、前述の如く、中味の異なるものをそれぞれ取扱いながら、『パイドロス』のプラトンと、『省察』のオルテガの構造上の照応性が極めて高いという事実を指摘するため「未開地」ながら敢行せざるを得ない。筆者が感じている矛盾を言うと、「土地や樹木はぼくには何も教えてくれない」というフレーズは、城壁の外へと、パイドロスにいざなわれて初めて出て、イリソス川のほとりを歩きながら、自然やその風物に身も心も羽根の如く軽やかな気分を味わった当の本人ソクラテスの口からはとても想像しがたいのである。それは読む者に激しいジレンマを抱かせる。ソクラテスから言えば、それぞれ対話術の基本なのかも知れない。つまり、そのことによって読み手や聞き手に、これから展開されるロゴスの世界に急激にひきこむことは必至だからだ。読み手や聴衆を意識した所謂エンターテイメント性(人間特有の好奇心を利用した)をもたらし、哲学との緊張関係を意図的に仕組んだものと言えよう。と同時に、『パイドロス』が「弁論術」と「恋」という二つの主題とする、対話を引き出すためにその対極的世界(非合理的現実)を前提として置いたのである。つまり、流れる川、数日のうちに生命を終える蝉たちのうた声、ボレアスにさらわれた美しい乙女のはかない運命など。この辺りのニュアンスを非常に有意義に表わす次のような文章がある。少し長くなるが引用しておく。

「厳密な言論(ロゴス)で捉えられるものがはじめて「ある」と言えるものであり、感覚を手がかりとして臆測されるだけのものは「あるもの」の位置には置かれえないと言っても、不変不動の「あるもの」のみを實在

として感覚現象をすべて全くの迷妄とするような考えはプラトンとは縁遠かったと言える。われわれに自然世界として直接あらわれるのは、感覚の流動の世界しかありえないのである」<sup>(7)</sup>

言うまでもなく、オルテガから自然を除くと、ロゴスは成り立たないし、ましてや『省察』は一行も前に進めなかっただろう。パスから自然を除くと、LDS からブーカンビリヤやピルーのメタファが脱落するのみか、まさに「自分自身性」や「他者性」は消滅してしまう。プラトンがその対話篇で駆使する語法を、オルテガは見事に継承する。人は本書冒頭に目をやるや、釘付けになる。ヘルマン・コーヘンの挑発的フレーズ（「ドン・キホーテは道化芝居ではないのか」）を劈頭に引用する方法だが、ナショナリストならずとも、いつまでもまどろんでいたい筆者と同じように冷水を浴びせられた読者もさぞかし多いことだろう。プラトン、オルテガ、パス、それぞれの文学には、目覚めのメソッドが巧みに仕掛けられている。ただし、目を閉じて夢見る場合にのみ見分けられる、という条件付きだが……。

### 第3章 世界史の始まりについて

パスは、LDS「第1章」の冒頭で、生のある時期に人は誰でも自分自身について問いを発する、と言い、心理学的には青春期的特徴とされるが、国や民族の場合も同じことだと語っている。われわれはこれを歴史や社会学の教科書を読むように、知識伝達の媒体とみなすと、その真意が伝わらない。事物とは、絶えざる探求と努力によって徐々に広がる原野のようで、ゆっくりとした愛の眼差しの下に（“con la mirada atenta y amorosa”）しか開示されないものである（ここでわれわれは古代メキシコ人が野生のトウモロコシに注ぎ続けた眼差しを想起しないわけにはいかない）。しかも、特定のドグマにでも頼って「理解」しないかぎり（それは本来的に「理解」ではない）、全面的な「理解」などありえない。詩的なイメージの多義性において感じとることが求められる。オルテガはこの点について、「理解しようとする懸命な努力の中には、一種の宗教的態度が横溢している」（21頁）と述べている。「理解」することの意味が問い直されるべきだろう。こうした問題意識から見ると、冒頭においてすでにLDS全体が明らかにされている。パスを読み始めたころ、文章の一字一句

に逡巡するときですら、他方では行間から溢れる多様なイメージに圧倒された記憶が残る。

そのときのイメージはどこからくるのか。一見何か新しい出来ごとでも、どのような認識、体験であれ、その根はもともと自分の内奥にあったもの。理解するとは、本来内にあるものを、外からやって来たものとして驚きをもって受け入れ直す行為と言ってよいだろう。ということは、特別な誰かの言葉をもってせずとも自ずと分かる。LDSの読み手には、これなどは冗長な繰返しとして不快感すら与えかねない。しかし、半面、理解するとは、こうした「不快感」とのせめぎ合いではないだろうか。つまり、現実には、これは流れに抗してなされざるを得ないからだ。パスは16世紀に至って初めて世界史に合流したメソアメリカ文明とヨーロッパ文明を継ぐ詩人である。この時代、ヨーロッパでは既にルネサンス、宗教改革が終息し、ギリシャによるコスモスの発見に匹敵する文化革命と言われるニュートン、ガリレオによる科学革命がまさしく始まらんとしていたことを想起したい。その時、メソアメリカ文明の人々は、パスの表現を借りるとすれば、“Nació solo, sola vivió”<sup>(8)</sup>（「ただ一人で生まれ、孤独に生きた」）であったことに常に意識的でありたい。パスはまた「この点を度外視しては、いかなる比較も成り立たないだろう」と語っている。これは、歴史研究に詩的想像力という重荷を背負わせる。LDSの理解を主たる目標とするわれわれにとって、パスの言わんとするところをよく把握することは、本研究の存在理由そのものと関わる。そのような認識の下に、再び冒頭の「認識」や「理解」についての「問い」を考えると、パスが用いる概念、それがどのようなものでも、そのまま無意識的にヨーロッパ「産」の「用語」（あるいは「意味」）を学問、思想上の常套句と同一のものと見做して、これを問わないのは真の比較にはなりえない。日本の場合、谷川俊太郎によると、中国から漢字を導入して、それを訓読みすることで従来の「やまとことば」との併用として成立した。それ故にまた、明治期に西欧の文物を日本語に翻訳することで、取り敢えず「輸入」できたのであるが、谷川の言葉を借りるなら、「根なし草的に受容した」<sup>(9)</sup>のであり、そのためにわれわれは今日においても、諸概念と現実との不一致に苦しんでいるのである。同様の課題を、後発的に近代を受け入れたヨーロッパの末端に位置するパスも、詩人として当然、どのように克服するかという死活問題を抱え込んだ。どのように自分自身のことばとして取入れ直すかという課題（例えば、リズムをことばの意味以上に重要視するのもその

葛藤の表われである)に苦しんだ。師であり、同僚でもある詩人で作家のアルフォンソ・レジェスが“miles y miles”(「何千何万」)篇もの論文を残したことの意味をパスほどよく理解する者は少なからう。オルテガやパスがまず自分自身を問うことから始めようとするのもそのあたりに理由があり、それは同時にデルボイの信託を拝す英雄的行為として、神話ともなるわけだ。パスの言葉、特に概念、用語を無点検に繰返えすと、これはわれわれ批評家の陥り易いところだが、16世紀以降の世界史的「合流」の意味はおろか、幾何学的な世界への疑問すらもおぼつかない。その再び前述の点に戻るが、これは一般化しえるものだが、「理解」という精神的行為には、元来自分の内奥に埋もれていたものに光を与えるということ、つまり自分自身と出会う(自己認識)という意味も含まれる。パスは、人がその単一性のある生物学上の時期に意識することはあっても、徐々に稀薄化するもので、「50年も経てば」すっかり忘れてしまうものと述べている。これは、16世紀まで独自の「生」を経験したメソアメリカ文明のあり方と、四大文明の遺産を継ぐヨーロッパ文明との相違をアナロジカルに論じているのである。単に発達心理学的な意味でだけ語っているのではない。16世紀までのメソアメリカ文明の特異性を、それ固有のものとして認識することが、伝統を伝統として認識するのと同じく一人一人の課題であることを同時に提起しているのである。それは、決して世界史に早く合流して、その遅れを取り戻すべく発展を急ぐ、といった進歩主義のそれではないのである。

彼の言葉を、彼の固有性において捉えるとはどういうことを意味するのか。彼の単一性を、生の一時期にみられる一過性のものとしてでなく、何度も再生するものとして、全体性としての緊張関係のうちに捉え直すこと。彼の個人的体験を一民族の原型と理解して、本来的な多様性として逆照射することが必要となろう。それは即ち、16世紀に初めて世界史に合流したことによる文明的な単一性を認識することと同等の作業である、と言えよう。パス個人において、メソアメリカ文明の単一性をめぐる歴史的、文化的、精神的問題(つまり、その独自性、個有性への変貌の問題)がどのように集中表現されているか、という問題の立て方が可能になる。

以上、ここで検討した事柄を要約するばかりか、パスの自己認識に関する研究の前提とも言える考え方を、冒頭で既に述べたが、再度、パス自身の言葉で確認しておこう。

「真の世界史はヨーロッパやアジアの大帝国、ローマや中国をもって始まったのではない。スペイン、ポルトガルの探索（exploraciones）をもって始まった」<sup>(10)</sup>

#### 第4章 詩と歴史：「人間の根」の場合

1990年、ノーベル文学賞の受賞講演の中で、パスは自分のイメージと自分を取り巻く環境、世界へのイメージとの重なりを次のように表現している。

「6歳のころか、従姉妹の一人が読んでいた雑誌を手にして〈これは戦場から帰った人たちよ〉と言い、大通りをパレードする兵隊の写真を見せた。数年前にどこか遠くの方で戦争が終ったことをなんとなく知っていたが、私にはこの戦争が今あったわけでも、ここで起ったわけでもなくどこかほかの時代の出来ごとだと思っていた。ところがその写真を見て私は自分の間誤いに気付いた。私は文字通り〈現在〉から転落した」<sup>(11)</sup>。

大屋敷、密林のような庭園、無花果の木、遊び仲間、山積みされた書物の匂い、こうしたものに象徴される「私の時間」が「架空の時間」（“un tiempo ficticio”）になり、「本当の時間」（“verdadero tiempo”）はどこか他の場所にあることに目覚める。パスの美しいイメージをもって語られる「楽園追放劇」である。世界中の誰も「大人になる」とき、このような経験をする。中心から「分離」した孤独感、「転落」したという喪失感、罪悪感となって残り、これが人間をして常に自分の「原点」即ち「母体」（matriz）に回帰したいという動物的衝動を抱かせる。パスはLDS「第1章」末尾で、ヘルダーリンの『熟れた果実』を紹介する。しかし、「イSPANアメリカノスである我々は、本当の現在はここにはなく、N. Y. やパリやロンドン、どこかほかの場所にあり、本当の時間も同様で、どこか他所に取りに出て、持ち帰らなければならないものだった」と言う。必然的に分裂感や亀裂感を内に抱え込むことになり、そのことがパスを文学に向わせることになった。そこで彼は「詩を書き始めた」と語る。1914年、世界戦争の年に彼は生まれた。このことが詩人パスを決定付けた。同時期にパスは近代のジレンマを背負うことになったからだ。パスの原体験は、従姉妹から見せられた一枚の軍人パレードの写真。それは、「すぐ忘れ

たが、一つの事件」として意識下に潜伏し続けて、パスの詩学、人間観さらには世界観に「戦い」が不可分のエレメントとなる。「反対物の合一」「人間とは戦争と休戦」「石と花」「星辰たちの宇宙戦争」「征服」「トラトアニ」「革命」「反乱」「血」「死」「球戯場」「人身犠牲」「ピラミッド」「収容所」「亡命」「政治的異端者」「クチージョ」「石榴」「黒曜石の蝶」「“siete”〈7〉」「火の人」「猿の踊り」「“abrazo”」「舌」「唇」「チャック・モール」「無」「沈黙」「論争」「批判」「対話」「“grito”（雄叫び）」「独立」「改革」など。

ここで筆者が目的とするのは、そのような当初の分裂感、亀裂感がどのようにして、またどのようなイメージとなって「地下水脈」を形成し、それがどのように現実を規定していくのか、人間の最もリアルな現実を問うことであった。次々に新しい現実が継起していくとき、それを生の流れに取り込むにあたって、われわれは何らかに経験というスクリーン（「翻訳装置」）をもって、それらを濾過して受けとめ概念化することで、普遍的な知識として活用するに至る。

スペインによる征服は金・銀の探索とカトリック布教の両面である。依然アニミズムの段階に等しかった新大陸にカトリック教が受肉された背景には、新たな信仰が土着神・トナンツインを継承するものであったからだ。だからこそ、それは又エバ・エスパーニヤの全体を一つの精神的共同体として繋ぐ一つの世界観が生じたのである。この点は「歴史の章」で詳述されているように、驚くべき早さと詩人バルブエナが絶讃する荘厳さ（“la grandeza mexicana”）をもって新首都テノチティランが誕生するのである。そこには近代の在り方を問うときの目安となる、伝統と近代の不可分の関係が読みとれる。しかし、それらは本稿の直接の主題ではないので、これ以上の言及は避ける。

それでは、パスはどのような「翻訳装置」を持っているのか。青春期の懷疑心を「翻訳本能」と見做すと、それは前述の如く一過性のものとして消滅するのであるが、これを周期的に、一種の宇宙のリズムのうちに蘇えらせる運動体を「翻訳装置」（先鋭な自己意識）と呼べる。パスはこの「翻訳装置」を自らの「三つの体験」<sup>(12)</sup>によって明らかにしている。LDS(1)<sup>(13)</sup>で既に検討したので敢て繰返すまでもないが、必要な範囲で語り直しておく。「自分を何か特別な存在と思わせる子供の頃の三つの経験を語っている。具体的には、形を変えて誰にも思い当たるところだが、彼にはその鮮烈な経験は、ある事態が臨界的に達する度に蘇える「先鋭な自己意識」（“aguda conciencia de sí”）として精神の一つのリズムと化している（p.121）。この一年前の考え方に現在もお

おむね同調する。しかし、先の引用部分には、一つ大きな欠陥がみられる。「体験」と「経験」の両方の意味をもつスペイン語、“*experiencia*”の意味が不明瞭であることだ。誰もが通過する青春期の「体験」が、その後の出来ごとを通して自覚的に批判的省察が加えられることで「経験」と化す。これは、先の「経験」が「翻訳本能」から「翻訳装置」に転化することを意味する。パスは、前者は万人が等しく通過する本能的なリアクションであるが、後者は精神に刻まれる「負の遺産」と考える。しかし、これは一般的な意味でのネガティブに作用する過去の、所謂「トラウマ」ではなく、パスの場合はむしろ詩人としての創作上のバネとしての、ポジティブな要素を構成する。むしろ、「正」と「負」の両遺産が激しくせめぎ合っていると考えるべきだろう。そうした現実を共有するため、パスはオルテガが「少なくともわれわれスペイン人にとっては、ある倫理的ドグマに熱狂するほうが容易なのである」<sup>(14)</sup>と述べるとき、誰よりもその真意を理解するのはパスであろう。習慣的なもの、日常的なものとの戦いは誰にとっても容易ならざる事柄なのである。パス自身、〈メキシコ人総体の心底にある「スペイン的なもの」(“*hispanista*”)と「反スペイン的なもの」(“*antihispanista*”)との「対決」<sup>(15)</sup>に対して一定の距離感を保つほか、常に深層の現実(“*la herida*”〈傷〉)を沈思し続けることで歴史に対してと自分に対して公平であろうとしている。オルテガと同様に、イデオロギー的弊害を指摘して、LDS「第2章」では「チンガーダ」(“*la chingada*”)という隠語についても実際にその被害者の存在を尋ね回り、その結果として事実上、そのような女性がいなかったことをわざわざ明証させている。単なる風評が歳月の経つうちに実態化して一つのイデオロギーと転化する、そして、それが共同体の集合的無意識を拘束していることを裏側から明らかにしている。

「三つの体験」は以下のように要約できる。(1)ロサンゼルス幼稚園での *cucharra* (「スプーン」) 事件、(2)フランス系学校での、米国帰りの少年に対する「村八分」、(3)ある農民革命領袖から「西ゴート系息子」と間違われたパス。(1)から(3)の事件、出来ごとに通底する、パスの内面の衝激は、“*extraño*”(「異質者」)、“*mundo hostil*”(「敵視する世間の目」)、“*extranjero*”(「外来者」)、“*sospechoso*”(「不審者」)、“*suspiciacia*”(「猜疑心」)といった言葉でかろうじてその精神状況が伝えられている。この状況が、既に述べたように、青春期の一般的特徴から「問い」へと置き代えられていくときの触媒役を果す。LDS「第1章」冒頭には、本書を基本的に貫く「問い」、“¿Qué somos y Cómo

realizaremos eso que somos?” の内に経験化されているのである。特に、(1)は、経験化されるとき、「語感」の特性（「クチャーラ」）、(2)雰囲気上の「質感」、(3)視覚的特権、と抽象化しえるが、そこで共通するものは、「主要なもの」、  
「支配的なもの」、  
「一般的なもの」との表面的差異と一般化できる。これらは、「対極的なもの」、  
「根源的なもの」との緊張関係において経験化されることによって、乗越えられる。この場合、「根源的なもの」（“lo profundo”）とは、「埋もれたもの」、  
「不可視のもの」、  
「もの言わぬもの」、  
「不動のもの」という原型（「モデル」）として置き代えられ、その結果、個別、具体的なものへのイメージとなる。先に列挙した象徴的な言葉をもって「地下水脈」に光が与えられるとき、そこには“lo profundo”なものが詩的現実として再創造されるのである。パスの初期の詩作品には、樹木、根、岩、水、空、石、血、太陽、葉、枝、鳥、風、星、などの詩語が頻出する。その内の一つ、「人間の根」（1937）と題する詩篇には、人間が樹木にたとえられる。幹や枝葉を支える、埋もれた不可視の、かつ不動の部分としての根が具体的イメージとして際立ち、それが人間の精神性を表現する。以下はその部分訳である。

音の楽を舞いより近く  
 ここは、不動なるままに  
 重き音の楽の居るところ

大いなる血気みなぎる樹木の陰に  
 お前は、まどろむ赤裸なちから  
 不動なるものの、愛しき娘

これにすぐる不動の空なく  
 これにまさる純血の裸身なく  
 お前は息絶えて  
 わが大気みなぎる樹木の陰に

すべての声を燃やせ  
 くちびるをこがせ  
 高き嶺に咲く花のうちにて

夜よ、いつまでもそこに止って

もう誰もお前の名を知らず  
 人知れぬお前の 力におよぼすは  
 満天に輝く星と 宙ずりの夜  
 不動の太陽<sup>(16)</sup>

（拙訳）

## 第5章 オルテガ、パス、大江——人間愛の流れ——

### （1）課題の限定

オルテガと大江を両脇に置いて、パスを浮き上がらせようと企てるほど不遜で、いかにも無謀な試みはない。奇を衒うにも程があるとの誹りは免れないだろう。これまで、オルテガや大江の世界に特別な関心を持つことのなかった筆者が、なぜ今このような愚挙に及ぶに至ったのか。卒直に言えば、窮鼠猫をかむ、場違いな譬えではあるが、そういう心境からである。そして、これら三者、「大いなる山」を「かむ」などという愚行に走るにあたっての唯一の口実、それはオルテガの言う、もうそれしか他に残されていないとき、そのものの言うことは全て正しい、という「励まし」によってである。単なる我田引水の暴挙であるかも知れないが、兎にも角にもLDSを読む、筆者の一貫した問題意識に沿って、同書に埋められたイメージの塊（文学性）を掘り起こすこと以外目的はないのである。この際、読んだと自分なりに腑に落ちた感覚にならない難所が随所にある。勿論、LDSを隅々まで読み通せるなどと、思い上がることはないし、それは一種、文学に対する冒瀆ですらあることを自覚する者だが、深刻な限界に直面すると、どうしても従来の見取り図では新たな展開が期せなくなる場合がある。外に開いて助けを求める道しか残されていないと悟るときがくる。パスもそういう窮状を幾重にも経験した人だし、その一つが初期詩集「驚か太陽か？」（1949）であろう。その点から言えば、本稿は、未知の荒野に向う大胆なる前進のときから、足元の読みとりに逡巡するさまをリアルに伝えることに主眼がある。こうした瞬間において異光を放ち始めたのがオルテガであり、大江であった。したがってこれら「二つの山」とパスを文学的に比較するものでも、相互の影響関係を検討することも本稿の目的とするものではない。

三つの山に関する個別の出来ごとや作品のジャンル上の違いは差し置いて、異質な山同士がぶつかり合って、「人間愛」(“amor a la vida”)のイメージへと結合、相互浸透をおこす、その瞬間に極めて深く有意義な読みの展望が開かれる。

## (2) LDS と註釈

議論の展開については無論のことだが、本書には註釈の少なさにおいて特筆すべき面がある。9の文章が章分けされずに並置されている点については既に検討した通りだが、この二つの特殊性については特別な注意力を要する。外国で執筆されたから註釈が少ない、という見方も出来ようが、説得力のある考えとは言い難い。2~3ヶ月で書き上げられたから、との見解もあろう。そのような、学術論文と同列に置くような説は現実からほど遠い。しかし、クラウゼやサンティに対して、自分のために書いたことを述懐している。この当時の彼の心境も吐露していると思われるので後者の文献から引用しておく。「パリで書きました。米国で2年暮したあと、パリで1年か2年過ぎた頃、長くメキシコを離れたため、他人と違っての自分(“me sentí diferente”), 異質な自分(“me sentí distinto”)を意識するようになった。そのため自己認識のために書きましたが、教育上、もしくはモラル上の目的はありません。自己を知るために、私は自分のルーツ、歴史を省察するようになりました」<sup>(17)</sup> われわれはすでに、パリに外交官として赴任した彼が同僚のウシグリと共に、「透明人間」となった悲哀を共有して「泣き笑い」したことを検討した。それは、自分たちが異質だと感じているにも拘らず、誰も彼らを固有の存在とみなそうとしない、つまり、そこに居るのに居ないに等しい無者(“Don Nadie”)的状況にあるに等しい。LDSの執筆は、自己認識の宙ずり状態の中で、真の自己自身に至るため、自己沈潜することを意味したことを改めて確認しておこう。つまり、読み手は自分以外にはない、という前提で書かれた。パスはこの不安定きわまる時期に、危機意識に襲われ、10篇の詩を書いている。これらは「動く砂」(1949年)の題の下に、詩集『驚か太陽か?』<sup>(18)</sup>(1951年)の支柱の一つを形成している。10詩篇すべてがそうだが、とりわけ、「青い花束」、「正体不明の二人への手紙」、「出会い」など、この時期の特有の異和感、二重人格的危機意識による激しい“recaída”(「喪失感」)を経験している。一種の幻覚症状に襲われたのであろうか、もう一人の自分との離脱感が生々しく迫ってくる作品で

あり、「他者性」に満ちた詩境を生んでいる。「動く砂」は、米国生活から3年目のことで、そこでのパチュコスとの「出会い」がどれほど深い衝撃を彼に与えていたかを想像させる。「私はパチュコだった。一体私はどうしてしまったのか」その時直観したことが、パリの空の下で戦後の廃墟を前にしつつ、リアルに迫ってくる何かがあった。パスの無自覚の部分が大きく言葉を規定していく瞬間だ。LDSはその中心の章、開闢の章「パチュコスとその他の末端」において、全体10ヶ所中、半数(5ヶ所)に注釈が集中している。われわれはこの点に注意深くありたい。これは何を意味しているのか。換言すると、どのような意味がそこに与えられているのかを探求することは、「注釈」に対する新たな自覚が要求されている、ということの意味する。冒頭章がほぼ自動記述的に書かれたことを思い出せば、むしろそこから当然生じる無意識の表現(言葉が現実には先行する)を理性で埋めようとしている事態が見えてこよう。詩と散文の落差を埋める行為はLDS全体に見られるが、「第1章」で顕著であることはそうした背景からであろう。筆者はそうした点に気付いたとき、特に二つの注釈のケースに注意を喚起されることになり、結果としては、深刻な「読み力」不足に直面していた。

### (3) 恐怖心のマグニチュード

「私には、米国が(略)将来がたとえ危機的なものであっても、その存続に確信を持っている社会だと思われたし、——今もそう思っている——。私はここで、この感情が現実、あるいは理性によって、正当化されるか否かを議論したいのではなく、その存在を指摘したいだけである。生に対する本来的な善性、ないしはその可能性の無限の豊かさへの、こうした確信が(略)私が会った殆どすべての人々の行動や言葉、そして顔つきにも(略)はっきりとうかがえた」<sup>(19)</sup>

われわれは単に注釈の長さ(分量)によってその重要度を計ろうとしているのではない。むしろ、冒頭章において注釈を施される、そのこと自体に特別な意味を求めているのである。先の引用文には、LDS全体のうちで2番目に長い注釈が付く。その要約を列挙すると以下の通りである。(1)この文章が書かれたとき、人にはまだ核の脅威に気付いていなかった。(2)核兵器の恐しさを知ったあとも、未来への確信を失わない。(3)核兵器を非難はするが、誰もそれを目

前に差し迫った深刻な脅威と受けとめていない。今、われわれにとり必要な事実は(1)に関してである。(2)と(3)に関しては、米国人の、自分たちの現実を知ろうとしない、単なるオプティミズムとして本文でも語っている。「米国人は現実を利用するほど、現実を知ろうとは望んでいない」(14頁)しかし、先述の通り、(1)に関しては、おそらくこの引用そのものの意義はここにあるのだが、なぜ世界に先駆けてその脅威に鋭敏でありえたのか。また、そこで感得されたことが素早く言語化したのか、という点にある。換言すれば、なぜ危機意識が人より早く、かつリアルなのか、である。当時のヨーロッパ情勢とパス個人の状況を簡単な年表にすると以下ようになる。

	ヨーロッパ・メキシコ	パス個人
1933	ドイツ・ヒトラー政権誕生	
1934	メキシコ・カルデナス政権誕生	
1935	フランス、人民戦線成立	
1936	フランス人民派、選挙勝利 スペイン人民戦線政府発足、スペイン内戦勃発	父ソロルサノ斃死
1937	ドイツ空軍、ゲルニカを爆撃 バルセロナで共産党系 PSUC とトロツキスト系 POUM、アナキストの衝突	メリダ(ユカタン)「遠征」 長詩「石と花の合間に」開始、 「悲歌」出版 ホセ・ボッシュと会う、「人間の根」出版 第2回反ファシズム国際作家会議出席(パレンシア)
1938	J・オウエル『カタロニア讃歌』出版 メキシコ石油国有化	パリ、第2回反ファシズム国際作家会議
1939	独ソ不可侵条約、第二次世界大戦勃発 フランコ、内戦終結を宣言	(ロシアの収容所施設疑念生じる) エル・ポブラール紙辞職
1940	メキシコでトロツキー暗殺	「石と花の合間に」完成
1941		「石と花の合間に」出版
1942		PSPC「マニフェスト」、 「世界の片隅に」出版
1943		グッゲンハイム奨学生として渡米

		ノバダデス紙執筆開始
1945	国際連合成立 アメリカ、初の原爆実験(ロス・アラモス) 広島・長崎への原爆投下 ヘンリー・スティムソン「陸軍高官日記」	マニャーナ誌特派員(4-6月) 国連総会取材 メキシコ外務省入省 パリ赴任(12月)
1946	国連第1回総会・1号決議(原子兵器、大量破壊兵器の破棄) チャーチル首相「鉄のカーテン」演説 小説「透明人間」出版、ペンギンブックス	
1947		ウシグリ帰国 アンドレ・ブルトンとの出会い
1949	ソ連、初の原爆実験、カザフスタン	(ロシアの収容所施設、確認する) 『言葉の下の自由』出版、テソントレ叢書
1950	朝鮮戦争勃発	『孤独の迷宮』出版、クアデルノス・アメリカノス版
1951		「驚か太陽か？」テソントレ叢書
1952	米国、水爆実験成功	
1953	ソ連、水爆実験成功	
1954	第5福竜丸、放射能被曝 米国、水爆実験、マーシャル諸島、ビキニ環礁	
1955	ラッセル・アインシュタイン宣言	
1956		詩論『弓と豎琴』出版、FCE

上記から推測するところ、LDSの「注釈」に示された危機意識は、ラッセルとアインシュタインが「わたしたちは自らに問わなければならない……(略)水爆を用いた戦争は人類に終末をもたらすことが十分にあるとのべている」と起草する1955年の宣言に匹敵するマグニチュードであり、しかもそれは6年も前に表明されている、ということだ。言うならば、ヘンリー・スティムソンが5月31日付日記に「それはフランケンシュタインとなってわれわれを食い尽くすかも知れない」<sup>(20)</sup>と書いた正にその恐怖心を抱いてのことではなかったか。パスは、「ひしひしと迫りくる戦慄感をもって」(“real y inmediata”)こ

の脅威を捉えていた、ということであり、これは、驚くべきことに原爆を開発した「マンハッタン計画」の文民の最高責任者、ヘンリー・スティムソンのそれに匹敵する、得体の知れない恐怖感を共有していたという事実が明らかとなる。こうした未曾有の危機意識の下ではじめて、「第1章」冒頭での「詩か、政治か」という二者択一を自己に課して、その生の緊張（目的）を規定しえたのである。

#### (4) 危機意識の根

詩集『言葉の下の自由』（1960）第2章は、「災厄と奇跡」（1937-1947）と題して29詩篇により構成されている。それらは「禁じられた扉」と「災厄と奇跡」の2つの小題からなり、後者には9詩篇がこの時期のものとして収録される。その冒頭は、当時のラテンアメリカで「最も社会的な詩」（M. ウラシア）とされる長詩「石と花の合間に」と、「政治的」とされる「アラゴン戦線に斃れた同志に捧げる悲歌」が配置されている。われわれはすでに、〈『孤独の迷宮』を読む②〉において、1937年という年が青年パスの人生で最も決定的な年であることを様々な角度から検討した。家族や学校、住み慣れた町を「捨てて」、ユカタン半島の中心地メリダに中学校の識字職員として奉職した。当時の意識ある青年の多くがそうであるように、パスも社会の変革は個人の積極的な参加意欲なしにはありえないと考えていた。ただ、特定の思想信条からは常に距離を保ったようで、“No demasiado”（「過剰に陥らない」）の精神がごく自然に身に付いていた。詩篇「メキシコの詩」はわれわれにはもう馴染みの深い作品であるが、この中でのパスの祖父、父親に向ける眼差しを想起すれば、「大思想」に対する彼の意識が、この時代の青年としては、容易に予想しえないほど冷めたものであることが理解できる。なぜなら、パスの人生の「先輩」たちはこぞって「それぞれの時代の大事件、大人物がそのまま彼らの人生でもあった」<sup>(21)</sup>のである。パスは仲間と共に「労農学同盟」（UEPOC）に所属し、労働者のための夜間学校教育に協力したが、そういう流れからメリダでの中学校創設を要請されたとき、やはり鋭角的な決断が下されたのであろう。時代状況が後押ししたことにもよるが、パスは思想と行動の同時反応にかつてない高揚感を経験する。それは、メキシコ革命の再来かと期待されたカルデナス大統領の誕生（1943年）とも深い部分で連動している。しかし、パスにこうした鋭角的決断をとらせた背景には、中学時代からの友人ホセ・ボッシュからアナーキ

ズムの影響を受け、クロボトキン、ブルードンなどの作品を読んだことにもよる。また、彼らの中学、高校時代にあたる1930年代メキシコは、革命の武闘局面が終わり、その制度化に向かう移行期にあった。流行語“revolucionario”(「革命家」)も、彼らには“dictador”(「独裁者」)を意味した。この二人にとり、現実には変革の対象以外の何ものでもない。学生を扇動した首謀者として彼らは一度ならず留置所を体験している。パスは後年米国に住み、現実には安住する米国人の姿を間近に見て驚いているが、根底的な変革を求める、こうした時代のメキシコ人の意識が根本にあるからだだろう。そのボッシュも、やがて不法滞在のスペイン人が国内政治に関与した罪で本国に送還される。数年消息不明だった英雄ボッシュが再びパスたちの前に登場するのはスペイン市民戦の勃発(1936年)とほぼ同時のことで、人民戦線側に立ち、フランコら反乱軍と戦っている、という情報によってである。ところが、しばらくすると、1936年のアラゴン戦線での戦死者の名簿が発表され、その中に彼の名前もあった、と知らされる。

これが1937年、パスがメリダ遠征に出発する直前までの、彼とボッシュの交友の主たる流れである。殉教者ボッシュの誕生によってパスとそのUEPOCのメンバーたちは、遠征直前の緊迫感を一層強めていた。彼らの行動もスペインのボッシュを通して、世界と連携して行われていたのである。パスは、友人ボッシュの死を追悼して一篇の詩を書いた。それは「アラゴン戦線に斃れた同志ホセ・ボッシュに捧げる悲歌」である。同「悲歌」はパスがメリダ入りするより前の、1937年2月21日に同市のディアリオ・デ・スルエステ紙に掲載された。「正に、ユカタンはこれらの若者たちにとり、ボッシュの〈アラゴン戦線〉のメキシコ版を意味した。このユカタンの支配的少数家族と、その封建体制はフランコと彼らファシストだった」<sup>(22)</sup>。つまり、ユカタンは彼らにとりボッシュの「吊い合戦」の場である。「悲歌」の一部を見てみよう。「同志、君は斃れて／世界の熱き夜明けのうちに消えた／君の眼差し、君の青いシャツ／砲弾を浴びてゆがむ相貌／君の両手、それらが君の死の中から立ち上がる／すでにその鼓動なく」、など劇的な詩句で始まり、「同志、君は斃れた」「君の声を思い出す」が繰り返され、「君はわれわれ同志のために、われわれ同志の内斃れた」との詩句で結ばれている。何のレトリックも駆使されず、痛恨の気持をそのまま言葉に載せている。アラゴンとユカタンの二つの戦線が重なっていることが、この詩篇が如実に物語っていよう。

その、戦死したはずの友が、1937年、訪問先のバルセロナで突如現われたのだ。しかも、変装して無言のうちにパスと交信してきたとき、パスの驚きは想像しがたいものがある。「数分間、言葉が何も出なかった。それから私は何かを口走ったが、聴衆にも私自身も分からなかったほどだ」<sup>(23)</sup>、とその瞬間を述懐している。咄嗟の判断と言おうか、「悲歌」の題名のうち「ボッシュ」を「同志」(“compañero”)に差し換えて朗読した、という。閉会后、少し遅く会場の外に出ると、黒い人影が近ずいてきて紙切れを彼のポケットにねじ込んで立ち去った。そこには翌日の場所と時間が指定され、必ず一人で来るように、また、そのメモ紙は即刻破棄するよう指示されていた。パスはボッシュとの秘密裡の会談の様子を実に酷明に記録している。残念ながら、要点のみを紹介するに止める。即ち、ボッシュらアナーキストたちは、フランコら反乱軍に対抗して大挙して人民戦線を結成した。しかし、これを牛耳るモスクワの共産主義者からフランコの回し者と宣伝され、秘密警察(「軍事情報局」)に捕まれば、殺害された。その追求を逃れて、ボッシュも住居を点々と変える地下生活者となっていた。そのような窮状を説明する彼の様子も尋常な状態ではない。目は宙を舞い、高熱に冒された病人の譫言のように一方的に話す。その後、突然、言葉を中断して、「もう急がないと、帰りが遅くなると怪しまれる。食事係の女が毒を盛るかも知れない」と口走る。「明朝、必ず電話する」と言って小走りに去る、その後ろ姿がパスの知る最後のボッシュとなった、という。彼からの連絡はその後一切止絶え、ボッシュを行方を知る者はいない。この「告白」は事件から55年経って初めてなされたものだ。「パス全詩集」(1992年)の解説において、パスはボッシュとの一部始終を開示している。その告白に先立ってパスは、「アラゴン戦線に斃れた同志に捧げる悲歌」は、1968年版LBPから削除されたが、S. バラル版「全詩集(1935-1988)」に再度収録することを決めたことを明らかにし、その決断の理由を、「真正なる(“leal”), 人民主権(“la popular”)のスペインへの私の変らぬ信念と、親友ホセ・ボッシュとの友情の証し」(p. 786)として下された、という一文をもって始めている。われわれは今、オクタビオ・パス全集第11巻『詩作品I(1935-1970)』に「アラゴン戦線に斃れた同志に捧げる悲歌」(p. 92)を見出すことができるが、そこにはこうした背景が隠されている。即ち、自らの原則破りをパスは敢て犯したのである。

筆者は、ここまで、極めて長い引用と解説をもってある一つの事実をどのよ

うに読みとるか、ということの判断のために前提条件を検討してきたのである。それはこの「項」の初めにも述べるように、危機意識の「根」に関わる問題である。われわれは、この、パスの、長い「陳述」から何を読み取るかである。結論から言えば、「憎しみ」である。イデオロギー政治における非情なる世界、人間を物と化し抹殺する現実を、パスは友人ボッシュを通じて目の当たりにした。LDS「第1章」末尾で語るように、「あれらの人々の中に〈別人〉(“el otro hombre”) が生まれている」<sup>(24)</sup>と確信する、その初期人民戦線政府にボッシュも参加していたし、そのわずか数ヶ月後には死人同然の地下生活を余儀なくされる、そのような現実にはパスは何を感じたのか。革命ロシアを防御することは、当時の若者にとっては至上課題であったことを思えば、彼の苦悩はどれほどであったことか。友人一人の生命とロシア革命の威信は天秤にかけられるものなのか。「1937年にLDSを書いていたら、結論は今と違っていただろう。共産主義に解決の道を求めていただろう」と語っている。1937年の「ボッシュ事件」は、確実にこの時計の針を押し止めたようだ。前述の「年表」を整理するにあたり、この点を強調しておいた。それは人間の人間に対する「憎しみ」だ。じわじわと追い込み精神の衰弱を待って物と化したところで殺られたボッシュもまた、敵対する人間への憎しみの権化と化していた。政治的イデオロギーが憎しみの非人間性を正当化する。パスはオルテガを想起したのではないだろうか。このスペインの哲学者は『省察』の冒頭でまず、「私はこれらの論文の中で、私よりも年若い読者たちに(略)提言したいのであるが、それはその方がたの心の中から、憎しみという習性をすべて追放していただきたいということ」<sup>(25)</sup>と懇願している。第一次世界大戦勃発の1914年に上梓された同書は、愛が憎しみからの救済として対置されている。しかし、パスは新たな憎しみが第二次世界大戦を準備しているのを目の当たりにする。彼は1937年、スペイン訪問中、仲間に交戦地を案内された、という。壁一つ隔てて敵の兵士たちの話す声が聞こえたとき、彼は敵も言葉を話すのだということを知った、という。憎しみから敵を抹殺するとき、相手はすでに物と化しているということ、パスは発見したのではなかったか。憎しみは非結合、愛(もしくは人間愛)は結合であり、相互浸透であるとオルテガは語っている。

この「憎しみ」の連鎖からの延長線上に戦後の核軍備競争がある。パスは、この「競争」が依然表面化していなかった段階で、すでにそれを予期していた。イデオロギーによる東西世界のすさまじい対決、パスはそれを第三次世界大戦

と考えていたが、それは「憎しみ」同士の激突であるから、その末路はラッセル・アインシュタイン宣言の言う「人類滅亡」が免かれぬということである。「実質的な争い防止のために、どんな手段をとることが出来るか」、このラッセル・アインシュタインの呼びかけに対するパスの応答が、LDS、である。私はここまで大江について何一つ言及してこなかった。しかし、筆者の念頭には常に彼のことがあった。とりわけ、筆者のイメージの中に急に存在感を増してきたものがある。それは、『人生の親戚』<sup>(26)</sup>において、2人の子供（知恵遅れの少年と、具体的な障害に絶望している少年）が現実生活は嫌だと思ってしまうようになって、死を選ぶ。そして大江は「こういう絶対的な不幸からどのようにお母さんが立ち直っていくか。それが、私のテーマです」（74頁）と述べているが、このような極限状態的な家族の一面をもって大江が表現しているものは、「人間愛」（“amor a la vida”）それ自体、であろうと思う。同小説のモデルでもある大江家の人々が、その新たな出会いによって、癒し癒される過程というもの家族というものゐる在り方を通して、その本来の姿を気付かせてくれるのである。それはさらに、日本人家族という次元を越えて、人類社会における人間愛について問う、世界性をもつものであろう。パスと大江が人間愛を問う思想と作品世界において深く響き合うことは、本稿で新たな読み筋を見出すなかで確認されたところである。

##### (5) 長詩「石と花の合間に」再考

LDS冒頭には、少しでも現場体験のある者には、目に焼き付いて離れない文章がある。

「さまざまな時代が同じ土地、あるいは数キロしか離れていない土地で相対して、互いに知らなかったり、かと思うと互いにむさぼり合ったりしている。異った英雄と習慣と暦と道徳観を持って、同じ空の下で生活しているのである。古い時代は決して完全には消滅しない。すべての傷は、最も古いもので、いまだに血を噴いている。（以下省略する）」（3-4頁）

メキシコの文化的、歴史的特徴が鮮やかに描写されている。この部分にもう一つ異例の注釈が加えられている。その要点は以下の通りである。(1)ホルフィリオ・ディアス期は、近代資本家の仮面をかぶる封建地主に支えられた。(2)萌

芽状態の資本主義の下で社会主義的教育が行われたり、革命を鼓舞する壁画が製作されたのはなぜか。即ち、ディアス期(1884-1911)新封建体制の根幹を問う(特に、歴史学者に対し)ものである。父親のO. P. ソロルサノは農民革命の指導者E. サパタの弁護士であったから、パスはこの現実を目撃していたことは想像に難くないし、また、本人もボッシュらと共に、これら物言わぬ大衆への働きかけを識字教育を通じて行っていたことは、既に前項で検討した通りである。しかし、パスが一人の責任ある人間として、この現実を自ら背負ったのは、「家や学校や町を捨て」メリダ市(ユカタン州)の学校建設に「志願」して後のことであろう。こうした現場体験を踏まえた上でパスが提起する「問い」は、深刻な意義を数多く含む。文面から見て言えることは、批判というよりは、問題の共有を求めている。そして、彼はLDS全体をもって自らこの「問い」に応答せんと意図している、と言える。しかし、そのことによって歴史研究者の想像力不足に対する免罪符とはならないことは言うまでもない。外国からの思想を受容し、国内の特殊な過程に下していくときの、特別の注意を怠ったインテリゲンチア全体に責任の所在があり、絶えず自己検証を行うことが当然の責務、との考えがこの注釈には含まれている。LDS(2)で既に見た通りだが、パスたちがメリダに入った翌年1938年、ラサロ・カルデナス大統領が直接現地に赴き、マヤの農民(エネケン栽培農家)に農地を分配する社会主義的な、一連の農地改革法案に署名したのであるが、これについても同様に、当時の目標から大きく外れている現状を注釈に書き込み、記憶を新たにしている。即ち、およそ30年後の1976年の大改訂版に追加された注釈がそれである。「農地分配にも拘らず、彼らの生活は改善していない。役所と組合の官僚主義の犠牲者であり、国際市場に左右されている。農民が資本主義経済の非人格的構造に束縛されている関係を示したかった。(以下省略)」<sup>(27)</sup>と語っている。パスは、若い頃、当時最先端の思想である社会主義的な自由平等の気風の下に社会変革を志したことで、その後の帰趨に責任を感じているのである。マックス・ウェーバーの言う、心情倫理と責任倫理の区別に意識的であるところから発する行為であるが、それが現実には極めて困難な自己認識であることは、カルバージョとの論争においてパスが指摘した通りである。にも拘らずパスが、すでに先のドイツの社会学者を他者と化していたことは、驚きを禁じ得ない。ともあれ、われわれはそこからパスが心中に大きな罪の意識を抱え込んでいることを推し量ることが出来るのである。なぜなら、「注釈」文の語調からみて、批判

的であったとしても、非難めいたところや、糾弾の質感がみられないこともまた一層、彼の深層を窺わせるのである。パスも近代化の必要においては迷いはなかった。国際商品エネケンに群がる先進列強の「咆哮」の下に蹂躪されるが如きマヤの先住民インディオに近代を問うことは、丸腰のまま交錯する砲火の前に立ち尽くすよう求めるに等しいことであった。当時すでに知名度の高かったパスは、自ら「広告塔」と化すことによって忘れ去られた東端の地ユカタンへのカルデナス政権の注意力を求めたのではなかったか。そのようにしてパスは自らの信念を貫いたのであった。しかしその思想の幾分かは、宿命的に時代の流れを受け入れていたことは否定できない。誰も現実の全てを見通せる者はいないし、あるとすればそれはイデオロギーの産物でしかなかろう。インテリゲンチアは、その現実の空隙をパッションによって合理化し、乗り越えて行く。所詮は、現実に関動的に関わる者の宿命を背負う社会的アクターである。ワイマール共和国の「知的祭典」<sup>(28)</sup>が反面教師として蘇る。何よりもトーマス・マンの『魔の山』(1924年)を意識したに相違ない。サナトリウムから下界に降りて戦場に姿を消した青年ハンス・カストルプ<sup>(29)</sup>に込められた歴史からの伝言が真に迫ってきただろう。メキシコにとどまらず、人間の歴史に責任をもつということ。このことに関してLDS「第1章」末尾に、少し前までは筆者にとり不可解だった、保存を表徴する箇所がある。それは、「古い原始の無秩序」への復帰は、すべての時代においてあらゆる意識に取りついている一種の脅迫である」と述べて、ヘルダーリンの詩を引用する部分である。

……もし、真直ぐな道を外れて、  
たけり狂った馬のように  
……(略)……地球の古い法が狂奔すれば。  
その時、形のないものへの復帰の願いが絶えず湧き出てくる。  
よく守らなければならぬ。  
忠実でなければならぬ<sup>(30)</sup>。

この詩句のうち、「形のないものへの復帰の願い(以下略)」の部分についてはイタリック体で表記されている。これは勿論、ヘルダーリン自身の表徴であるが、そこに何らか言外の意味を含んでのことであろう。パスは同詩篇の引用のあと、引用詩句最後の二行(“よく守らなければならぬ／忠実でなければならぬ”)を引用している。

らぬ)を文として再び繰返して用いている。しかも、前者、「よく守らなければならぬ (“Hay mucho que defender”)<sup>(31)</sup>」の部分だけイタリック体で表記して、ヘルダーリンの「形のないものへの復帰の願いが絶えず湧き出てくる」 (“un deseo de volver a lo informe brota incesante.”) のイタリック体表記の詩句と「応答」し合っている。パスはヘルダーリンの詩篇を「混沌という(略)大きな口が、宇宙と人間に対しておこなう宿命的な誘惑を前にしての恐怖」<sup>(32)</sup>を表現したものと述べている。同詩篇の意味するところをパスの解釈に従うとすれば、なぜ、「よく守らなければならぬ」にイタリック体を施したかが理解できる。パスはヘルダーリンに相槌を打ったのだろう。しかし「よく守る」とは一体どういう意味なのか。これは、「宇宙の秩序を守るために」と直ぐあとに出てくるが、この場合の強調した表現として〈よく「守る」〉ということの意味するのだろうか。それは「守る」という行為の「程度」<sup>(33)</sup>について言及している、としか考えられない。困みに、これをスペイン語で重訳すると、“defender bien”とか、“defender efectivamente”ということではないだろうか。もし、筆者の疑問が間違っていなければ、“Hay mucho que defender”には、「守るべきものが多くある」という日本語表現の方がその原文をよく反映する、と考えられる。この線に沿って、パスとヘルダーリンの「人間の本能的な傾き」と、「人間の節制 (“mesura”）」に関する危機の交感を、通俗的な表現に置き換えると、〈人間は本能的には無秩序の混沌に流され易いので、(節制が肝要である)、われわれ人間には守るべきものが多くある。それら多くの守るべきものに忠実でなければならない (“Hay que ser fieles”〉であろう。ヘルダーリンの時代において、詩句としての “Hay mucho que defender” は、パスの時代には、すでに現実の意識の問題として、変質しているとは言え、パスはそれをイタリック体とすることで、その本来的な意味で表現したのである。そこに隠されているパスの思想は、「保守」のそれではなく、「保存」 (“con-servar”) のそれである。

パスの罪の意識は、ヘルダーリンの詩句によって増幅する。でなければ、イタリック体によって応答しなかったのではないか。真に責任を持つとはどのようなことなのか。それがここでもう一段高い次元で問い直される。「信念の殉教者となるか、追従者となるか、人は二分されたのみならず、批判と暴露と幻滅の時代でもあった」<sup>(34)</sup>と、1930年から1945年(パス16-31歳)までの時代状況を振り返っているが、自らの思想に責任を持てばこそ、自己検証、自己批

判は免れず、同時にそこには、罪の意識が随伴してくる。パスはこの時期、こうした答えのない「問い」と向き合った。そして、それは一生涯、新たな「問い」、新たな「応答」として続くものであった。

#### (6) 長詩「石と花の合間に」再考

長詩「石と花の合間に」(EPF と略す)は、先の「悲歌」と並ぶ政治色の濃い詩作品である。〈Mérida, 1937/México, 1976〉の日付入りは、O. パス全集第11巻、詩作品I (1935-1970)に「決定版」(“la versión definitiva”)として入り、〈Yucatán, 1937/México, 1940〉の日付入りは同全集第13巻、作品集(“Miscelanea”)I、〈初期論文集〉に収録されていることから推測できるように、LBP第2章「災禍と奇跡」の筆頭を占める代表作ながら、パス詩学の原則から逸脱するため、最も波乱に富む経過をたどる。LDS(2)で若干触れているが、詩人パスの創作上のモチベーションとして将来にわたって深く規定していく「ユカタン体験」と不可分の詩篇であることには変わりない。先の拙稿で筆者は、「自然と共にある文明に生まれながら、物質文明に蹂躪されるマヤの末裔たちの悲哀、無力感、そして何よりもそれを招く原動力としての人間の欲望という、現実を明々白々のうちに見抜く「孤独」の塊の大きさを凝視する姿が行間に透けて見える」(181頁)というイメージの下に同詩篇を理解していた。また、〈長詩「石と花の合間に」新旧二版に関する一考察〉<sup>(35)</sup>と題する別稿において、新版、即ち、先の「決定版」(1976年)と旧版(1937年)の両詩篇を比較検討し、その背景を詩人パスの個人史のうちに関連付けたものであるが、ここでもまた、前近代に生きるマヤの農民が「資本家」のむき出しの搾取に喘ぐ生の不条理を憤怒する青年パスの姿があった。後者の拙稿では、1976年版をどのように読むか、というもう一つの課題もあるが、いずれも社会的不正義、不平等の廃絶に向けて変革の旗手たらんとする詩情において共通したものがあつた。例えば、1937/1940年版では以下の詩句が見られる。

凍った号泣の光の下で  
 不動の憤怒、エネケンが  
 その緑なす 不動の人差し指もて  
 われをかきたて 焼き尽くす  
 無言の怒り かたち見ゆ<sup>(36)</sup>

1976年版では、

緑して泰然自若 エネケン  
幅広の肉厚三角の葉 芽吹きて  
植物の三日月 刀の供給者  
エネケン 武装せし植物<sup>(37)</sup>

(拙訳)

いずれもエネケンの独特な形状をもって人間の心理描写の象徴的記号となっている点では共通する。その感情の表出の仕方では、激情の暴走に寛大であり、1976年版では、かなり抑制が効いている。およそ40年の時間の経過を考えればこの変化は首肯できる。憤怒する青年パスの心の様態には一切変化はない。筆者はこうして一種のアポリアとして、この難渋詩篇を断念するか、一種のアパティアとして、自己満足するかの分かれ道に立ち往生したとき、初めて大江と出会った。そこで新たな読み筋が照射されることになった。「悲歌」への新たな視座が彼の「人間愛」によって開かれたことは、既に検討した通りである。今回は、罪の意識というインテリゲンチアに不可避の心情を、大江文学から感得しえたからだ。それは、大江が小説「個人的な体験」(1981年)で取扱うテーマそのものである。彼にとりその後の創作上の大きなモチベーションの一つとなる、「奇形に生れたわが子の死を願う青年の魂の遍歴」のそれである。自分を表現することで、もう一人の埋もれた自分(「別人」, “el otro hombre”)と出会う。そうした過程で、「青年」とその家族は「家族全体の、自分のものとしての障害の受容ということで、子供と一緒に受け入れ支え」<sup>(38)</sup>てきた、という。その子供は現在、作曲の仕事をし、両親の「媒介なしに」自分の努力で社会とのコミュニケーションを開くに至った。即ち、傷付いた家族にとっての回復の過程、それは物言わぬ存在に寄り添い耳を澄ませて、その魂の叫びを受け止める、「長い道程」でもある。

パスにとり、マヤの農民たちは、もの言わぬメキシコそのものであっただろう。パスとその仲間たちは、本当に近代の使者たりえたのだろうか。その魂の叫びを忍耐強く聞くことが出来たのだろうか。パスの「問い」は、40年後の改訂版(1976年版)に至るまで止絶えることはなかった。先に引用したパスの文言が雄弁に物語っているし、またそうでなければ、特別に「注釈」を施し

て永久に記憶に止めることはなかっただろう。

### (7) 煉獄の自己検証

先の拙稿 LDS(1)において、1959年のLDS改訂増補版をきっかけに生じた、作家カルバージョとの論争を検討した。この論争の詳細は割愛するが、「人間の生存条件の変革を指向しない」(293頁)という同作家の批判を、その再反論の冒頭で取り上げている。パスはそれに応じるように、彼が「いかなる現実的基盤に依拠して「人間の生の在り方」を問題とするのか)、(つまり、パスに対する批判の根拠)を問い直したのに対して、彼は〈正統社会主義〉を信奉していると述べるに止め何ら具体的な議論を試みることはなかった。そこでパスは、この論争を終えるにあたって人間の生の問題を純然たる経済問題と捉える近代の合理主義的考え方(ラモスやカルバージョを指す)とは別に、これまで排除されてきた「もう一つの現実」の存在(芸術家、作家、詩人)を確認している。「我々の世代は間断なきイデオロギー闘争と絶えざる良心の危機、検証の内に生きた」、がしかし、60年代に入っいま、「経済的繁栄によっても、我々は警戒を解くことは出来ない」と「問い」をさらに持続させている。ウェーバーの言う責任倫理がインテリゲンチアの本質と見做していることが明らかだ。

詩篇 EPF を、当時のラテンアメリカで最も優れた社会詩(M.ウラシア)と評したり、「不出来な政治詩の一つ」(G.シェリダン)と考える者もある。同様に、筆者もこうした第一印象に左右される時期があったが、常に新鮮な「問い」が消えることなく続いた。問題は、同詩篇は実際のところ、確信に満ちた詩篇なのか、ということである。社会詩や政治詩とするなら、不正と搾取に喘ぐマヤの農民たちに対する救済あるいは解放の意志に満ち満ちていてもよはずだ。しかし、この詩篇のどこからも、そのような、言わば革命的高揚感が感じとれないのだ。すでに検討した通り、彼らは「ユカタン遠征を、〈アラゴン戦線〉のメキシコ版と位置付けていたにも拘らず、である。この点のある程度感じさせる(確証するかどうかは定かではないが)興味深い詩句が第三連の冒頭に配置されている(これは、第一、第二連を受けていることは今さら言うまでもない)。

もしもわたしがうたえるならば  
渇きを照らす この淵で

住み暮らし、村暮らしする人間を  
 雨のように潤い、倦むことのない人間を  
 その誕生が号泣を止める  
 傷付き 美しい一本の樹木の如き人間を  
 沼地を流れる一筋の河のような  
 稲妻に似た鳥のような人間を  
 その終末と果実の合間の人間を、うたえるならば<sup>(39)</sup>

(拙訳)

この部分は詩人パスがマヤの農民に対して抱いている最深部、即ち最もリアルな心が表出しているように思われる。つまり、自分の理想とする人間を、マヤの人々に重ねてうたってみたいが(うたえるものならば)、しかし、現実には、私にはそれは不可能だろう、という心の流れを読める。文法的に言えば、接続詞 Si (「もし……ならば、」)を用いた条件文として、“Si pudiera cantar”と接続法過去形による表現がなされている。即ち、「現在の事実に対抗の仮定を表わす文」<sup>(40)</sup>で、これは従属節(条件節)で用いられ、主節(帰結節)が可能法単純形をもって受けられるのが一般的である。しかし、同詩篇には、その部分が欠落している。文法的には、この場合、「もしかして、……ではないだろうか」、「……ならどうしよう」、「……であるはずがない」、「……であればいいのに」<sup>(41)</sup>という多義性に富む詩句が配置可能であり、これらのうちのどの表現を連結させるかによって、その意味は多少異なる。いずれにせよ、そこには詩人の感情の交錯、葛藤そのものをより深みのある形で表現する、と言える。即ち、詩人は主節省略をもって、多様な可能性(そこには、功名心も含まれる)を暗示しつつ、実際には、最終連における大団円を強く意識させる部分と言える。結論的には、このような読みが可能であろうが、詩人の心理状況を、文法的な配置とは別に、現実的な事象との照応関係を探ることで一層深まろう。

接続法過去の主節は、非現実的的条件文の帰結部分として、「もしも、私が……の(人間)をうたえるとするならば」に対する、「(私は)……するのに」となる。このような余韻をもつ詩句が第三連冒頭に2度繰り返されている。ユカタン解放をめざす意気揚々たる詩情が全く見られない。例えば、「うたう」(「詩化する」ということか)と訳したが、スペイン語の“cantar”という日常の言葉が用いられていることも違和感がある。また、そこに特別な意味が込められ

ていることにも注意すべきだろう。LDS②で、われわれは、“Canción mexicana”（「メキシコの詩<sup>うた</sup>」）について検討した際、“cantar”の名詞形“canción”に特別なニュアンスが込められていることを指摘しておいた。この場合，“cantar”も同様の含みがあり、これをどのように開くかについては意見の分かれるところだ。筆者は、成果を誇示する自分を抑える感情より、巨大な沈黙を前にしての虚無的な詩境「パスはかつて〈“Dificultad casi insuperable!”（「ほぼ克服不可能な困難さ」）〉<sup>(42)</sup>と表現した」を感じさせる。それは何故かと言うと、先述の通り意気揚々とユカタン遠征に向ったはずのパスには、「もしも、私がうたうとするならば」という控え目な表現は似つかわしいからだ。筆者はこの部分で大江から深く影響されるのを感じた。「私どもは、この子供と一緒に、かれの障害の受容、受け入れを支えようとしてきた」と大江は語っている。この「障害の受容」の部分で、「ユカタンのマヤの末裔たちの受容」と置き換えれば、逡巡するパスの姿が浮上してくる。長い道のりのうちに支えてきたのだろうか。「うたえるとするならば」ということは、勿論、詩人の営為それ自体を表わすものだろう。第一、第二連を見ると、伝わってくる通り、炎熱大陸に何千年と生き続けるマヤの人々の苛酷な現実（パスのインド大使時代の作品「ヒマチャル・プラデシュ」<sup>(43)</sup>（1）、（2）はマヤのインド文明への移し換え）と、先進列強、封建地主の前近代的収奪に苦しむ彼らと自分とを重ねるように、刺、渇き、号泣、憤怒、剣根、侮蔑、火、火炎、死、復讐、といった言葉を多用し、先鋭なイメージを立ち上げている。この部分には、1940年、スペイン、フランスから帰った直後のパスの窮状そのものと符号するとしても、マヤ農民の現実をイメージさせるのみならず、より重要な点は、パスがインテリゲンチアとして責任の一端を担うことによる厳しい良心の呵責に曝される、自分の現実をもそこに見ているのだ。つまり、2つの製作日付をもつEPFの読みの重層性を考慮しなければならないが、UEPOCのメンバーとして変革の旗手としてメリダに立つパスからは想像もつかないアビズムに彼が直面していた、ということである。その詩句のすぐ直前のフレーズ、つまり第二連の末尾のそれを検討すると、より明らかである。

嗚呼、復讐にもえる白熱の輝きよ  
 この乾燥の地獄の唯一の火炎  
 生まれる間もなく死する愛

なんとという深く沈んだ沈黙なのか  
 なんとという沈黙の熱気か  
 おまえの裸の、炎のうちに生じることか  
 おまえの死を、ただうたうために<sup>(44)</sup>

(拙訳)

この部分は、25年ごとに開くエネケンの真紅の花を読んでいる。その満開の花をもって、農民の困苦を対称的にうたいその労を讃える、という読みが成り立とう。そのイメージが連を代えて連続していくなかで、“Si yo pudiera cantar”（「もしも、私がつたえるとするならば」）と、25年目のエネケンの花、詩人の営為としてそこに何ものかを重ねようとしている。即ち、ささやかな詩人の生によって自分は一体何ができるのか、できることがあるとすれば、と仮定しつつ、それに照応する帰結部では沈黙する。現実には何も出来はしないのだ、という現実の自分を諦観として受けとめている。第三連の後半には、こうした詩人の限界を受け入れたかのように、“Tú caminas”（「お前は歩いて行く」）という詩句が反復される。ここには、“Si yo pudiera cantar”に対する間接的な応答が見られる。つまり、「もしも、私がつたえるものならば」に対する「お前はそれでも自分の道を変わずに歩き続けることだろう」という、彼らの不動性を強調しているのだ。われわれが求める道とお前の歩き続けるであろう道とのかすかな響き合いが第四連において暴走する。貨幣が暴力的な支配本性を発揮する。西欧列強がユカタンの初期資本制社会に与える衝撃を〈エル・ディ・ネ・ロ〉（「貨幣」）の連呼によって立体化させようとしている。1940年版から部分訳を試みると、以下ようになる。「貨幣は人生の歯車——日ごとにお前を腐らせる」、「大地と夢の天使、知られざる遠き水、嗚呼、見放されたる者よ、嗚呼、無垢なる者」、「貨幣は魔術師」、「貨幣は水と埃」、「空気を消費する火」、「美しい貨幣は忘却させる」、「音楽の扉を開き、欲望の扇を閉じる」、「死は死ではなくて影、貨幣の見ぬ夢」など。1976年版で言えば、全体56詩句からなる最終連（76年版では、40年版の第5章が全て削除されている）のうち、26回〈エル・ディ・ネ・ロ〉が占める。詩語としての意味にもまして、歯車の回転音の効果を出している。パスは1938年、ヨーロッパから帰って、メキシコ中央銀行で使い古された紙幣を毎日焼却する仕事に一時時期就いていた。燃やすことで世界が回る、そういうイメージが重なっているのであろう。ここ

には、マヤ人を巻き込む〈エル・ディ・ネ・ロ〉一色の世界を、詩人のそれとは相反する道として鋭く対立させている。第一連で多出した棘、剣鋼鉄、火、激怒、号泣、といった詩語は、全て「痛み」「硬直」「憎しみ」を連想させる象徴であったが、最終第五連は、ある意味では同質のものであり、同連の形を換えた反復とも受けとれる。同連冒頭の6詩句を参考に挙げると、以下の通りである。

与えよ われに 不可視の炎 冷たき剣なる  
お前の執拗なる激高を  
全てを終らせるために  
嗚呼、乾いた世界よ  
嗚呼、流血の世界よ  
全てを終わらせるために

(拙訳)

これに続くのが“Arde”(「燃えよ」)という言葉で、全33詩句中、15詩句において用いられている。激しく熱した機械的な反復運動としての回転を印象付けている。この詩法の下に表現されているものを推測することは、それほど困難なことではない。先述の第四連のイメージと合わせて考えると、激しく渦の如く回転しつつ舞い上がる炎のほかには想像しにくかる。

パスはオロスコの壁画を初めて見たときの衝撃を次のように語っている。「国立高等学校(ENP)に入学して初めて観たときも、それから50年経った今観ても、それらの巨大な極彩色のアイロニーは、私に衝撃を与える」<sup>(46)</sup>と。特に、パスを震撼させた作品は、グアダハラ市のカパーニャス救貧院(現カパーニャス文化センター)の天井画「火の人」(“el hombre de fuego”)である。それは煉獄の業火で焼かれる人間の悶え苦しむ姿が、くるくる渦に巻き込まれるように沈んでいく大パノラマである。第五連でパスは、この「火の人」に自分を重ねている。自分の思想や理想の世界観で人の運命を変えることが出来るか、という「問い」であろう。この「問い」が彼の全身に針を突き刺すような痛みを常に与えているのだ。そして、最後には、罪の意識から、煉獄の中で業火に焼かれる自分をイメージしているのだ。

わたしの譫妄の骨の合間に  
不可視で純粹の煉獄が燃える

ここに、大江と同じく、パスの作品の全てに見られるのは、地下水の如く流れる罪の意識のイメージである。そして同時に、その炎を凝視する別人(“el otro hombre”)もまた立ち現われるのである。それは、読み手もまた救われる思いのする瞬間である。(了)

《注》

- (1) *Meditaciones del Quijote*, Revista de Occidente 社, Madrid, 1914. 本書は〈西洋評論〉社の出版になる『オルテガ全集』全9巻(1946-62年)の第1巻に収録される。同書からの引用に際しては、必要と思われる場合のみ本文中に記す。全て白水社刊の日本語版(1968年版)の頁数に相当する。
- (2) “En México la suspicacia y la desconfianza son enfermedades colectivas.” *Itinerario*, FCE, México, 1993, p. 18.
- (3) *Revista de Occidente* 誌。1923年オルテガにより創刊。「以降12年間、哲学、科学、文学などの最新のテーマをスペイン語文化圏に伝えた」(『世界の名著』56, 〈マンハイム, オルテガ〉, 高橋徹編集, 中央公論社, 1971, 552頁)。
- (4) “uno de los conferenciantes era nadie menos que Ortega y Gasset. El día de su conferencia lo escuché con emoción. También con rabia: a mi lado algunos provincianos franceses y suizos se burlaban de su acento al hablar en francés. A la salida, quisieron rebajarlo: no sé por qué estaban ofendidos.” *Hombres en su siglo y otros ensayos*, Seix Barral, España, 1984, p. 107.
- (5) 『パイドロス』藤沢令夫訳, 岩波文庫, 1967, 14-15頁。
- (6) 拙稿, 〈オクタビオ・パス vs. 「透明人間」——『孤独の迷宮』研究序説——〉をさす。法政大学言語・文化センター, 『言語と文化』誌, 第6号, 2009, 119-120頁。
- (7) 種山恭子「ギリシャにおける自然哲学とコスモロジー」新岩波講座5, 『自然と哲学』1985, 134頁。
- (8) Octavio Paz, “México en la obra de Octavio Paz” FCE, México, 1987.
- (9) 谷川俊太郎『詩を考える——言葉が生まれる現場』思潮社, 2006, 176頁。
- (10) LDS(0), 131頁。
- (11) Octavio Paz, *Obras Completas*, T. 3, FCE, México, p. 35.
- (12) Octavio Paz, *Itinerario*, FCE, México, 1993, p. 14-19.
- (13) 拙稿「オクタビオ・パス著『孤独の迷宮』を読む1——構造解明の視点から——」法政大学言語・文化センター, 『言語と文化』誌, 第7号, 2010.
- (14) オルテガ『ドンキ・ホーテをめぐる省察』長南実訳, 白水社, 1968, 17頁。
- (15) 拙稿『孤独の迷宮』を読む(2)——流れに抗して——『言語と文化』誌, 第8

- 号, 2011, 187 頁。
- (16) Octavio Paz, *Libertad bajo palabra*, FCE, México, 1960, p. 25.
- (17) LDS(0), 109-110 頁。
- (18) Octavio Paz, *¿Aguila o sol?*, 野谷文昭訳, 書肆山田, 2002, 43 頁。
- (19) オクタビオ・パス『孤独の迷宮』, 高山智博, 熊谷明子訳, 法政大学出版局, 1982, 14 頁。
- (20) 春名幹男「原爆から原発へ —— マンハッタン計画という淵源 ——」『世界』6, 岩波書店, 2011, 69 頁。
- (21) LDS(2), 168 頁。
- (22) 前掲論文, 182 頁。
- (23) Octavio Paz, *Obra Poética (1935-1988)*, Seix Barral, 1990, p. 791.
- (24) オクタビオ・パス『孤独の迷宮』吉田秀太郎訳, 新世界社, 1976, 24 頁。
- (25) 『ドン・キホーテをめぐる省察』, 16 頁。
- (26) 大江健三郎『人生の親戚』新潮文庫, 1989, 77 頁。
- (27) Octavio Paz, *Obra Poética*, p. 785.
- (28) 脇 圭平, 『知識人と政治』(ドイツ・1914-1933) 岩波新書, 1973, 106 頁, 109 頁。「ベルリンの黄金時代をつくった」, 「噴火口のほとりのチャールストン」など。
- (29) 前掲書, 132 頁。
- (30) 『孤独の迷宮』, 19 頁。
- (31) Octavio Paz, *El laberinto de la soledad*, FCE, México, 1981, p. 29.
- (32) 『孤独の迷宮』, 18 頁。
- (33) 有本紀明ほか, 『和西辞典』白水社, 2001, 1291 頁。「よく」とは、(質的に) bien, (量的に) mucho. estudiar mucho (「よく勉強する」), pensar bien (「よく考える」) など。
- (34) Octavio Paz, *Octavio Paz en España*, 1937, FCE, México, 2007, p. 126.
- (35) 拙稿〈オクタビオ・パス——長詩『石と花の合間に』新旧二版に関する一考察〉駿河台大学論叢, 第 38 号, 2009。
- (36) 前掲論文, 68 頁。
- (37) 同上。
- (38) 大江健三郎『あいまいな日本の私』岩波新書, 1995, 30 頁。
- (39) Octavio Paz, *Obras Completas*, T. 13, p. 109-110.
- (40) 会田 由, 長南 実『テーブル式スペイン語便覧』評論社, 1961, 126 頁。
- (41) 西和中辞典, 高垣敏博監修, 小学館, 1990.
- (42) Octavio Paz, *Primeras letras (1931-1943)*, Vuelta, 1988, p. 261.
- (43) LDS(0), 108 頁。
- (44) 前掲論文, 109 頁。
- (45) 前掲論文, 241 頁。